

## 秋山の遭難事例

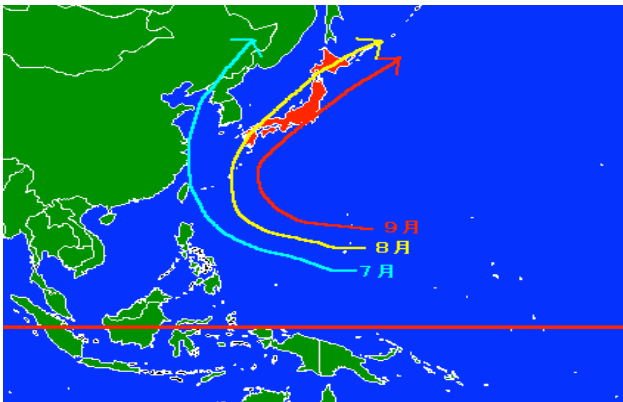
文責：原田

### はじめに

みなさんは秋の山にどんなイメージをもっているでしょうか？雲ひとつない秋晴れや、紅葉に染まる山の景色などを想像する人もいるかと思います。しかし、秋は山での気象遭難が多い時期でもあります。今回は秋山で起きた過去の遭難事例を取り上げながら、秋山の遭難を防ぐ知識を深めていきたいと思います。

### 秋山気象と遭難事例

- ① 台風・・・秋は台風の多いシーズンです。夏の間日本列島をおおって、台風の接近に対し壁の役割をしていた太平洋高気圧が後退し、台風が日本を直撃するようになります。



### ● 台風10号の黒部川遭難

1982年8月1日か2日にかけて台風10号が中部山岳地帯を直撃。黒部川下流の岩小屋にビバークしていた鵬翔山岳会パーティー7人が、急激に増水した川の濁流にのまれ死亡。

### 対策

#### 1. とにかく避難する

・・・本格的な台風の直撃を受けたら、登山者の力ではとうていできません。運悪く登山期間中に台風遭遇したら、意地を張ってテントで頑張ろうとはせずに、山小屋に逃げ込むのが一番です。

#### 2. 台風接近時には入山しない

・・・入山時に南海上で台風が日本上陸の様子をみせていたら、迷わず登山を中止すべきです。

- ② 雨、みぞれ・・・秋は、厳しい冬の寒さを経てきた春と違って、体が寒さに慣れていないために、みぞれや雪にあうとあっけなく凍死してしまうことが多いです。

<凍死と凍傷は全くの別もの>

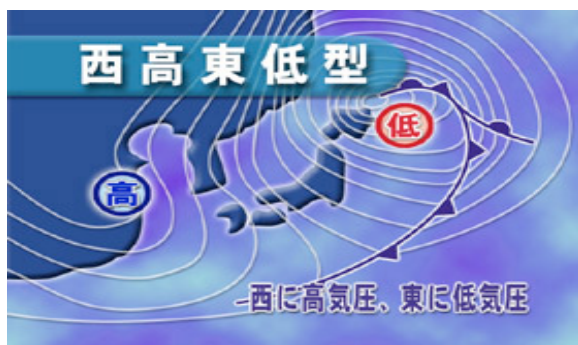
**凍傷**：体の組織が凍結することで起きる傷害⇒気温が氷点下にならないと起きない

**凍死**：体温がある程度以上（約 32 度 C 以下）低下して、体が正常に機能しなくなることによって起きる⇒気温 10 度 C でも、体熱がどんどん奪われるような状況であれば凍死することがあり得る

### 対策

1. 体を濡らさない（特に肌着）

- ③ 吹雪・・・秋山で一番怖いのは、低気圧が日本の東海上で発達し、一時的に西高東低の気圧配置になって、吹雪になることです。（日本海側の 2000 メートル以上の山では、10 月中旬以降は西高東低の気圧配置のもとでは吹雪になると考えたほうがいい）

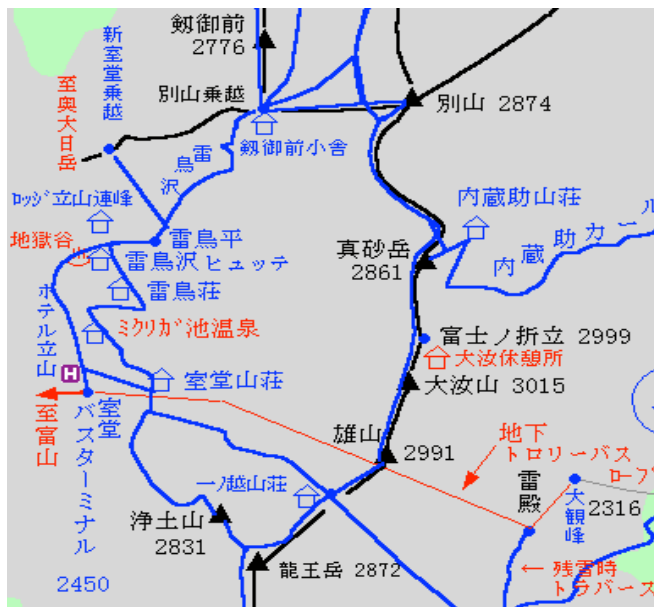


### ●中高年パーティー立山遭難

1989 年 10 月 8 日、立山連峰で中高年登山者パーティー 10 人が吹雪のため遭難し、うち 8 人が凍死した。

### ○当日の天候

10 月 8 日は台風 25 号が日本の東海上を通過し、千島列島沖に達した。一方、大陸からは高気圧が張り出してきていた。このとき、一時的に西高東低の冬型の気圧配置になり、中部山岳地帯は吹雪となった。



○なぜ、8 人もの死者を出す惨事となったのか？

引き返す判断をしなかった

・・・いくつかの登山を中止する判断を下すべきポイントがあったにも関わらず、それを逃し、行動不能になるまで前進を続けた。

## 対策

### 1. 登山者が体と心の備えをしっかりとする

・・・冬山ではごく普通の気象条件（マイナス 5℃、雪、など）でも秋山では遭難が増えるのは、登山者が秋山の吹雪に対しての危機感をもっていないことが大きいです。秋山の吹雪に対する予行演習をするのは難しいことですが、「3,000m は平地より 18 度も寒く、10 月の日本アルプスはいつ吹雪になってもおかしくない」という知識をもっていることが大切です。

### 2. きちんとした防寒対策

## 終わりに

秋山の気象遭難について今回調べてみて、これからは危機感をもって山に登ろうと改めて思いました。また、山に登る時期によってどんな遭難事例があり、どんな対策をすれば良いかをあらかじめ調べておくことが大切だと思うので、これからも山に対する知識を深めていきましょう。

## 参考文献

福島功夫『秋山』（山と溪谷社、1995年）

飯田睦治郎『登山者のための最新気象学』（山と溪谷社、1999年）